



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065
 編集 早川清志
 題字 島崎洋路

『出来れば出して使いたい』

開催前日の金曜日、大型の台風十六号が九州に接近し、ここ南信地方の天気予報では土、日両日に傘マークがついていました。少なくともどちらか一日は雨を覚悟していたのですが開けてびっく



やまなみ森林組合伐出班出動

り、まったく雨も降らず、秋を思わせるさわやかな気候の中で伐出をおこなう事ができました。お隣の鳩吹公園でも土日は「まほら伊那地球元氣村」の各種イベントが催され、ともに安堵の



続いて遊山組合の方

か。そしてレイの多目的ウインチ、ひつぱりだこ、ポランテアの間伐グ

二日間でした。人件費は高いが材価は低迷する状況の中で、間伐された材の七割、八割が切り捨てられているようです。高性能大型の林業機械も各種出現して

そのまま放置しながら化石燃料を使いつづけていく事に疑問を投げかける人はたくさんいます。何十年も守り育ててきた先達たちのためにも、何とか出して利用する、そして経済的にも成り立つ、こんな仕組みができれば素晴らしい事だと思います。大規模ではありませんが、

ませんが、小、中径材を出したいときにはお手ごろの機械です。二十五キロとちよつと重い



彼のチェーンソーによる作品ではありません

12時 小屋に戻って昼食公園の小川に足を浸けてお弁当
 1時 現場に戻り午後の部開始。多少蒸し暑い程度で、すこしやす
 4時 午後の部終了。講師総括。解散
 29日(日) 8時30分 山小屋に集合。講師挨拶。昨日は準備体操を忘れたので今日はイントラ川島の指導で忘れずにやる。現場へ。昨秋の集中コースに参加してくれた遠藤さんがストープ薪集めに顔を出す
 それぞれ順調にこなす
 12時 小屋に戻り昼食。昨日同様公園の芝生でお弁当を広げたら、車椅子のヒゲのおじさんが「くろろっさん、くろろっさん」などといいつつ通る。川島さんの曲げわっぱ弁当を覗き込みつつ「お!!!いいえ!!!」後で聞

たでしようか。そしてレイの多目的ウインチ、ひつぱりだこ、ポランテアの間伐グ

8時30分 島崎先生の山小屋に集合。講師挨拶。日程説明、班分けの後、伐出方法の説明
 9時30分 まずみヶ丘平地林の現場にむかう。伐倒は小屋すぐ下、伐出は間伐の現場。二日間で班ごと「ひつぱりだこ」「キヤトラ」「ロギングトラクタ」と伐倒のローテーションをしよう
 12時 小屋に戻り昼食。昨日同様公園の芝生でお弁当を広げたら、車椅子のヒゲのおじさんが「くろろっさん、くろろっさん」などといいつつ通る。川島さんの曲げわっぱ弁当を覗き込みつつ「お!!!いいえ!!!」後で聞



キャタトラ「やまびこ号」これも働き者

いたら地球元氣村の村長、風間深志さん。年初めてのパリ・ダカール・ラリーで事故に遭い大怪我、つい最近退院されたばかりらしい。早く良くなつてください

1時 現場に戻り午後9時開始。昼少し前に口ギングトラクタがガス欠したので軽油を給油。エア抜きをして始動しようとしたが、何度やってもかからない。あきらめて後藤班には伐倒をしてもらう。(翌日、入れた燃料が怪しいという事になり、燃料をすべて入れ替えたらい

4時 伐倒の大野班を最後に、みな小屋に戻り講師講評。解散

参加者/江上さん、小野沢さん、角田さん、梶永さん、金田さん、小名川さん、佐々木さん、笹原さん、杉村さん、田中さん、堀さん、増井さん、湯澤さん、服部さん、大河内さん、園田さん、成田さん、矢島さん



「ひっぱりだこ」は何度も出張仕事をこなした

次回以降の予定

9月18日(土)

見学

午前中は有賀建具店さん、午後は木材市場の見学です。山小屋に8時30分集合。市場では模擬入札も予定しています

第十二回

9月19日(日)

枝打ち

ぶり縄を作つて木登りし枝打ちの練習。現場はますみ平地林。山小屋に8時30分集合。枝打ちの担当は保科先生です。何のために枝打ちをするかがポイントです

専門コース第三回開催

10月1日(3日)(金/日)

いよいよ三回目。少し太い木に挑戦してみましよう。いろいろの道具も使つて。小屋集合

第十三回

10月16日(土)

測量、

製図

山の広さを測る。傾斜はどれくらい?測つて図に落とします。鉛筆、分度器、ものさし、電卓持参のこと。

第十四回

10月17日

(日)

林道設計

リレー通信

「樹の精に憑かれ、きこりにさせられようとしている中年サラリーマンのお話」

田口憲二



こ近年、木に対し敬意と呼ばれるような気持ちを持ち始めている自分がある。

子供のころは田舎で野や山を駆けめぐり、自然の中で育った自分が思い出される。木登りもその中のひとつである。小学校の三年の頃、たろうか、柿の木の間を飛び移る遊びをしていたが届かず落下し、足を骨折したことがあった。公園とかはなかったが、自然は欠かせない遊び場だったのだ。

しかし、木に対する思い出は、子供のころ以来、最近まではほとんどない。学校や会社の中で左右され、人生を送ってきた自分のせいのように思われる。もう少し、木

というものに関心をもち機会があつたら、違つていたかもしれない。

ところで、最近特に、自分の生き方やこの世界の不条理について考えることが多くなつた。そのため、私は「真」なるものは何か、何が大事なのか、といったことを考えることが多くなつてきた。

この経済至上主義、またバーチャルな世界の人間の感情や行動への支配、あふれている物質、自然破壊、将来への純粋な希望を阻むさまざまな人間のしわざ等、これらによつて私たちは心を奪われ、また動かされて

いる。そのことに気づいてはいるものの、歴史の中で、「たれば」がないように、どうしようもない空気に支配され、向かうべきところに流されている。

したがって、主体的に生きることができず、また真に生きる実感が感じられず、フラストレーションを感じている。世の中で基準となるのは、数量化され、計り、計られ、それに価値を付けられる。それで、自己を縛り、また他人をしぼる。それはつまり人間性の欠如が、この世のフラストレーションとなつてきているのだ。

あらゆる情報が身の回り

にあふれ、ちよつと気を向ける、どつと自分に流れきて、あつという間に時間が経つてしまふ。自分の属する組織では、その流れに従つていくと、いつの間にか一日、一週間、一ヶ月、一年と時間がすぎていく。

そういつた時間の中で、ちよつと息をつぎ、自分にとつて真なるもの、大事なものは何か、を感じることは大切であると思う。その時、もう一人の自分が語りかけてくれる、「人生は短い、然らば真に、大切に生きるべし」と。

以前の、木には何か生きるものから伝わる「魂」といったものがあったが、実感したことはなかった。ものを見る目は、心次第でどのようにも変わり、また、ものから語りかけてくるメッセージも変わってくるのだ。

ここ数年、私にはものを見る気持ちの変化があった。あらゆるものに魂があり、それを汲み取るうとすると、益々そのものが自分にとって大事に感じられる。

そういうものに囲まれていることは、気持ちがいいし、安心感があるし、心が豊かになる。ものだけではない、もろろ人間に対しても同じである。やはり、周りのあらゆるものに感謝をし、また尊ぶことで豊かな人生を送ることができるのであると思う。



で、森林塾で保科先生が言われた、「木にも魂というものがあり、それを伐採した後、切り口に小枝を差

して、その犠牲に対し、感謝の気持ちこそあるということがある」と、確かに大きな木に出会うと、何か年配者への敬意といったものと同様のものを感じる。その木肌に直接触れ、腕で抱えるとその存在感が実感できる。

私たちの周りの身近な生物で、一番大きいものは木である。木は常に上に伸び成長がある。時々その成長に感心させられることはあるが、頭ではわかっていても、一般にはなかなか実感がわかない。私もそうであったが、今は違う。木に心を奪われてしまっている。自分の行くところ、いつも木が気になる。

今、ボランティアで里山の環境保全活動をしていて、もっと技術や知識を身に付ける必要性に駆られる。木がうまく育ち、また、その地域の環境に貢献することに、力を注ぎたい。そのためにはノウハウがある。そのノウハウを身に付けるため、この森林塾に参加した。その結果、期待していたものが得られた。同じ志の塾生にも会えた。短期のため時間が十分ではなかったため、納得できるほど十分に実践はできなかったが、多くのことを学ばせてもらった。木を愛する先生方やインストラクターの方から、経験からしか得られないことを学んだ。

エコロジカルな生活をしたい。皆さんも考えたことがあるのではないだろうか。エコロジカルを英和辞典で探してみると、形容詞で「生態学」という意味である。エコロジストは「生態学者」、エコロジカリーは副詞で「生態学上、生態環境的に」だそう。エコロジーは名詞で

リレー通信

エコロジカルな生活
をしたい

田中 照務



私はこれからすぐ行動に移したい。また経験をもっと積みみたい。そこには自分の求めている事が発見でき、また生きる実感が得られると思っている。

後日談：森林塾の終了の後、すぐスチールのチェンソー（塾で使用したもの）を買ってしまった。安全のことを考えて、安全具も買ひ揃え

「生態学」のほかに「生物と生活環境との関連を研究する」という意味だと分かった。生態学は自然環境とそこに住む生物の関係・関連を研究する、人間と自然環境との共生を考えるという意味だろう。

環境問題は古くからあるが、近年、公害が大气汚染、水質汚濁、土壌汚染をもたらし、人々の健康を脅かした。とりわけ、1960年代の高度経済成長期には深刻な環境汚染が広がった。同時に公共事業の名の下に大規模な開発が自然破壊として問題になった。経済活動優先が環境破壊をしてきたのだ。1970年代には公害を規制する法律が施行された。ある程度の効果は出たものの根本的な解決がなされたわけではない。CO₂排出量は増え続け、地球の温暖

ました。毎週土日が楽しみます。また、森、林を見るたびに、どうなっていて、どうすればいいのかを考えます。サラリーマンの自分が何年か後、きこりになる姿がときどき頭をかすめます。



化は止まらない。高速道路の建設、ダム工事などの公共事業は拡大を続け自然破壊はますます進行の度合いを強めていった。経済優先の基本は変わっていないのだ。

1990年代になって緑の地球環境を守るつという声は世界に広がり日本でも盛んに論議されるようになった。地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、森林の減少など一國だけでは解決できない問題を先進国も途上国も抱えている。地球規模で解決策を考え、実行する以外には止まらないところまできてしまったのだ。

こうした動きは自分自身の生き方としてエコロジーに関心を持ち、エコ生活をしなければという気持ちを強くさせる。そうは思っても実際にできることは些細なことだ。それでもやらないよりはいいと自分に言い聞かせながらの生活ぶりを紹介してみたい。

妻は早くからエコ生活を実践してきている。妻の台所エコ三つを紹介すると、その一は、新聞折込広告を折りたたんで紙のゴミ箱をつくる、広げると約15センチ四方の生ゴミ入れになる。食事の支度が終わることに生ゴミのはいった箱を処理する。おかげで生ゴミの回りを虫が飛び回ることもないし臭い

